

ジョゼフ

sari-sari

ほうこく書 ○月×日

コウジョウへの潜入は無事完了し、フカシギという名前で働くことになりました。明日からさっそく、調べをはじめます。

ほうこく書 △月×日

例の件が行われている、だいたいの場所を突きとめました。引き続き、けんめいな調査にはげみます。この小さな王国で見かけるのはやはり、少年たちとロボたちのみです。大人はいないと思われまふ。コウジョウをはじめとする、すべてのカイシャ、お店で少年やロボが働いており、少年の年齢もロボの大きさもさまざまです。バーですら、マスターと呼ばれグラスを磨いているのは、ぼくと同じ年ほどの男の子です。どの職業も、先輩が新入りに仕事を教え、評価はジツリョク主義が用いられている模様。

ほうこく書 □月×日

先日、家来のロボたちと散歩をする国王の姿を目撃しました。ウワサどおり、はるか昔から王国を治めてきた王の正体は、幼い男の子でした。赤く長いマントを引きずり、金色の巨大な王冠を頭にのせ、唯一の友だちと言われるヒヨコのぬいぐるみを抱え歩いていました。マントは重たいし、王冠はぶかぶかだよ、と国王は少し不機嫌でした。それから、あのことですが、どうしてもしなければいけないのでしょうか？ たしかに、コウジョウ内で不穏な行動をしているやつがいるらしい、と近頃ウワサになっています。だからと言って、コウジョウの別の誰かを犯人にしたてあげるのは、乱暴すぎるのでは……。ご検討をお願いします。

ほうこく書 ◇月×日

ご命令通り、いなくなっても誰も困らない、分からないであろうロボ一体に、疑いの目が向くようにしました。昨日の午後、コウジョウに私服ケイサツカン二人が来て、そのロボをこっそりと連れていきました。今日、コウジョウにそのロボは現れませんでした、気づくものは一人もいませんでした。言われたことはしました。ぼくの弟に危害を及ぼすのはやめてください。秘密を盗むため、王国(こちら)で今まで以上に頑張ります。

コウジョウの窓から眺める空はいつもうすい灰色で、もちろん雲も灰色なんだけどぶ厚く見えて、気づくとぼくの心も同じ色に染まっている。

どんなに晴れた日でも、あの窓からの景色はすべてくすんで見えてしまう。ガラスがくもっているわけでもないのに、どうして、とぼくは首をかしげる。

「フカシギ！」

名前を呼ばれ、ぼくは振りむいた。おにやんま先輩が、こわい顔でこちらをにらんでいる。

「フカシギ、貼り付けのときはよそ見するなって何度も言ったよな。ロボはパーツ同士をくっつけるときがいちばん危険で、いちばんかくじつさを求められるんだ。そのボンドはお前が思っている以上に強力だからな。なめてかかっていると痛いめにあうぞ」

「すいません」

ぼくは帽子を取り、ぺこんと頭を下げる。

「ちょっと腕がよくて、同期のやつらより先にキカイコウ見習いになったからって、調子に乗るなよ」

最後のセリフをぼくの耳元でささやくと、おにやんま先輩は自分の肩でぼくの肩をこづき立ち去る。ぼくは先輩の背中に向かってもう一度頭を下げてから、帽子をかぶりなおす。

きっと長年たまりにたまった色んな人の悪意で、コウジョウ全体がおおわれてるんだ。だから空はいつだってにごって見えるし、作業場は昼間でもうす暗くて湿気てる。はあ、ぼくはため息をつき、遠ざかっていくおにやんま先輩の後ろ姿に目をやった。

ここで働く先輩たちの中でも、体の大きいおにやんま先輩はとくにいばって怖い。さまざまなことに口を出してくるけれど、ボンドの使い方にはもっとも厳しい。

というのも、先輩がまだキカイコウ見習いだったときに（おにやんま先輩は現在、半人前のキカイコウ。このコウジョウ始まって以来、異例の遅さでやっところさ半人前のキカイコウになったらしい。ははは）、ボンドで遊んでいたら、どういうわけか背中にじかにボンドがかかって、パニックになってゴミクズの中に飛び込んだら、トンボのおにやんまの翅が四枚、背中にぴったりくっついちゃって、どうしても取れなくて、だから先輩はおにやんまなんてニックネームで、ボンドの使い方うるさいのだし、あのでっぴり太って大きい背中の上部にはいまだに、トンボの翅がちょこんと四枚張りついている、というウワサは本当だろうか、と考えたら、さっきため息をついたばかりのぼくの口元は、すでににやりとしていた。

とはいえ、ロボの貼り付け作業は本当に気をつけて、難しい。たった一か所、小さなパーツをてきとうに配置しただけでも、見た目や重さのバランスはくずれてしまう。けれど、こんなところでつまずいているヒマはない。ぼくははやくキカイコウ見習いを終え（さらに欲を言えば、技術優秀者として半人前のキカイコウもすっ飛ばし、おにやんま先輩のくやしがる顔を横目に）、一人前のキカイコウになるのだ。そうすれば、今よりももっと自由にコウジョウ内を歩き回れるし、あの部屋の秘密だって……。

リーンリーンリーン。終業のベルが鳴った。ぼくは工具や作りかけのロボをしまい、持ち場を

離れる。

さあ、まずはいったん寮に帰って……。などと考え歩いていたら、ういっす！ と背後から威勢のいい声が出た。振り向くと、ぼくと同時期にここで働き出した男の子、レイン・ドロップが立っている。たしか年齢は彼の方が一つ上で、十四歳だったはずだ。

「ああ、久しぶりだね、レイン・ドロップ。相変わらず元気そうで」

ぼくがすばやく、人なつこい笑顔をして言うと、彼はなぜか表情をくもらせた。

「まったく、相変わらず他人ぎょうぎだな。フルネームで呼ばなくていいって。ドロップだけでいいから」

そうだったね、ごめん、と謝ってから、ぼくはもう一度笑い、同じセリフを口にする。

「じゃあ、ドロップ。相変わらず元気そうだね」

おう、と彼も笑って両腕を大きく回した。

「オレはそれしか取り柄ないからな。フカシギも元気そうじゃねえか」

そう言ってから、ドロップは顔をしかめ、自分の左腕にそっとふれた。

「まだ痛むことがあるの？」

僕は尋ねた。ときどきな、とドロップはぽつりと言う。

他のみんなも仕事を切り上げ、そろそろと作業場を後にしている。出入り口のドアへ吸い込まれていく、少年とロボの群れ。

コウジョウの、いや、この小さな王国に暮らす少年たちの多くは、どこかしらケガをしている。足を引きずっていたり、眼帯をしていたり、服の上から分からなくても上半身にひどい火傷のあとがあったりする。

理由を聞いても、みんな首をかしげるばかりだった。自分の誕生日以外、何も思い出せないんだ、と。目が覚めたらこの王国にいて、ヘンテコな新しい名前でもコウジョウへ勤めることになっていた、と。

目を閉じる直前、よく見知った大人がそばにいて、その掌は赤く染まっていたり、シャワーを握りしめていたりした気もするけど、分からない、もういいんだ、みんな口グセのみたいにつぶやく。体に違和感はあるけど、痛みはほとんどないしね、とも。

ロボはロボでキカイコウ見習いになった少年たちが、ガラクタや鉄くずをボンドで貼りあわせ作ったものだから、見た目は正直、イケてない。けれど人工知能を持って、アタマがきれるし、もちろん言葉だって話す。そしてなによりも、このロボたちは感情を持っている。その方法はもちろんトップシークレット。ほんの一握り、一人前のキカイコウたちだけがそれを知っている。巨大迷路のようなコウジョウの、さらに奥深くにあるいくつもの小さな部屋のどれかで、一人前のキカイコウたちがロボに感情を吹き込んでいるのだ。

もちろん、小さな王国のこんな大きな技術を、小さな脳みそであんな大きな国のリーダー（であり、ぼくのボスであるひと）が欲しがらないわけがない。

だからぼくが、スパイとして送り込まれたのだ。

「あの技術の秘密を探るんだ。それと、王国の様子を逐一ほうこくすること。隙を見てわが軍を

送り込みシンリヤク、支配下に置く」

スパイになるよう国に育てられたぼくの、今回が初めての仕事だった。

そんなことよりさ、とドロップがふたたび口を開いた。

「そんなことより、今夜久しぶりに同期たちで飲みに行こうって話になってさ。いつものバーへ。マスターから連絡がきて、十年物のいい桃ジュースを仕入れたらしいんだ。ショートケーキもサービスしてくれるみたいで、みんなに話したら、たまには金曜の夜にパーッとやろうぜって。で、フカシギもどうかなと思って」

「せっかくの誘いだけど、ごめん。今夜はちょっと」

予定があるんだ。寮に戻ってから、ぼくはふたたび、今度はコウジョウに忍び込むのさ。あの部屋についても、この建物全体についてももう少し探っておきたくてね。なんてこと、もちろんドロップには告げず、ぼくはただあいまいに微笑む。

「なんだよ、また寮に閉じこもってお勉強かよ」

ま、そんなとこかな、ぼくは平然をよそおって答える。

「たまには付き合えって。結局、先輩たちってさ働いてるときよりも、バーで居あわせて一緒にジュースをくみ交わした方が距離がちかくなるよ。ちょっと下手に出て、カワイイやつだって思われれば、コウジョウでの色んなことがすんなり行く。あいつだけもうキカイコウ見習いになってやがる、生意気だなあ、なんて言われなくて済むぜ」

そこで言葉を切ると、彼はぼくをちらりと見た。ぼくとしてはなんて言うか、せいっぱい優しい表情をしていたつもりなのに、ドロップはなぜか苦笑いで、やっぱ無理か、とつぶやいた。

「簡単なショセイジュツだと思うけどなあ。慣れちまえば、あんがい楽なもんだよ」

淡々と話すドロップを見て、今度はぼくが苦笑いする番だった。説得力ないよ、どうしてそんなに悲しい目をしてるの？

「ま、フカシギは優秀で同期の星だからさ、頑張ってくれよな。先輩らは色いろ言うけど、オレたちは応援してるから」

じゃあな、とドロップはかすかに笑い、ぎこちなく左腕をあげ去って行った。今夜は仕事はやめておこうかな。ふと思った。やっぱりぼくも行くよ、今そう叫べば、ドロップはもう二度とあんな悲しい目をしないだろうか。ぼくは息を吸い込む。

いや、するだろうな。吸い込んだ息を口の中にためたまま、ぼくはほの暗い天井を見上げた。とても自然に、無意識に、あのまなざしは繰り返されるだろうな。ドロップだけじゃない。もはやこれは、コウジョウで働くものの職業病だ。でも、ぼくは違う。ぼくの目は悲しさなんてとっくの昔に通りこし、今はただ、にごっている。

口の中ですっかりぬるくなったコウジョウの空気を、ぼくはゆっくり飲み込んだ。かすかに苦い味がしたのはぼくが弱虫だからじゃない、ここの空気がよどんでいるから、と自分に言い聞かせて。

帰ろう、ぼくが足元に視線を落したとき、近くで、ガタッと音がした。

辺りはくず置き場で、ロボを組み立てるときに使う鉄くずなんかが山積みになっている。そのゴミ山のすそに、ひと際大きい鉄くずがあった。でも、鉄にしては形が……。ぼくはその鉄くずの方へと歩いて行く。近づいてよく見ると、そこには一体のロボが倒れていた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

ロボは何も反応しない。どこかに不具合があるのかな、ぼくはボディに目をやる。ロボは一メートルほどの大きさで、にぶい銀色をしていた。そのタテに長い半月型のボディに、ぼくは見覚えがあった。でも、はっきりとは思い出せない。どこで見たんだっけ？ そんなことを考えつつロボを点検していたら、背中に大きなネジがついているのを発見した。ネジは止まりそうに、けれどかすかに動いている。ぼくはイチかバチかで、そのネジを巻いた。

ブーンと低いモーター音がして、次にピピピと高い電子音が響く。

「ここはコウジョウ。ボクはジョセフ。アナタはだ、あ、れ？」

ロボがしゃべった。起動したばかりで、まだ少し言葉がつかないけれど、大きな故障はないみたいだ。

「ぼくはコウジョウのキカイコウ見習いだよ。君が倒れているのを見つけて、よく分からないけど、ネジを巻いたんだ。そしたら君が動き出した」

ネジが、と言ってロボは短い腕をガチャガチャ動かし、自分のボディを触っている。ネジネジ、と何回か呪文のように唱えたあとで、ロボはふっとぼくの方に向き直った。

「そうだ、ボクはジョセフ。そのまんまだけど、みんなからジョセフって呼ばれてる。あれ？ ボクは最初に名前を言わなかったっけ？ まあいいや。アナタは？」

「ぼくはフカシギ。ぼくもみんなから、そのまま、フカシギって呼ばれてる」

「そう、フカシギ。そうだ、フカシギ、助けてくれてどうもありがとう」

どういたしまして、ぼくはほほ笑む。ジョセフはすっかり元気になったようだった。銀色のボディは心なしか、ツヤが出てきたように見える。それじゃ、とぼくが立ち去ろうとすると、
「待って、フカシギ。何かお礼を……。そうだ、一杯どう？」

ジョゼフに案内された店は、裏通りにある雰囲気の良い小さなバーだった。

カウンターに座り、ジョゼフはアップルオイルソーダ、ぼくはオレンジジュースを注文する。金曜の夕方だけあって、店内は混みあっていた。王国のすべての店は八時閉店だから、それまで、あと二時間と少し。閉店ギリギリまで、今夜は客足がとだえることはないだろう。

「おうーい、バナナジュースのオリーブ油割りをもう一杯。うんと濃いめでね」

「そろそろ、シメのごはんにしようか。すいませーん、オムライス三人前。えっ？ もちろん！ オムライスの上には、小さな国旗をたてて！」

「せんぱい、なたね油ロックで三杯は飲みすぎです。もうやめときましょ。あんまり油をさしすぎてもよくない、ってお医者様から言われてるんでしょ」「うるせ、若ぞう！ こんなポンコツなオレに優しいのは油だけなんだよ……。だまって飲ませてくれ！」

店内のにぎやかさは最高潮を迎えていた。この心地いいざわめきと、ジョゼフの口調は似ている。店に来るまでの間に、ぼくはすっかりジョゼフに気を許していた。

「初めて来たけど、すてきな店だね。うん、飲み物もおいしいや。ここ、いつもは同僚と一緒に？」

お通しのマロングラッセをつまんで、ぼくは尋ねる。

「いや、だいたい弟と……」

へえ弟がいるの、僕は眉をひょいっと上げることでその意思を示す。ジョゼフも自分のお通し、バネのにこごり、を一口食べてから話し出した。

「さっきのように、ボクの背中ネジは突然止まることがあるんだ。ネジが止まると、その瞬間、ぼくの電源もオフになってしまう。最初は止まるたびに、ボクを作ったキカイコウ見習いの男の子が巻いてくれていた。でも彼には時間がなくて、だからボクに弟を作ったんだ。いつどこでボクのネジが止まっても察知して、駆けつけるようにプログラムされた弟を」

「時間がないって、そんなに忙しいひとだったの？」

ネジを巻くヒマもないほど、あわただしいことなんてあのコウジョウにあるのかな、ぼくはジョゼフの背中をかたかたとゆっくり回るネジを眺めて思った。

知らないの？ ジョゼフは口に運びかけたグラスをテーブルに置き、驚いた様子だった。

「十八歳までに一人前のキカイコウになれなかった少年は、十八歳を迎えた日に突然、姿を消してしまうんだ。その代り、一人前のキカイコウになれたら、その瞬間から永遠に歳をとらないし、消えない。ボクと弟を作ってくれた男の子も、一人前のキカイコウを夢見てたけど……。十八歳の誕生日を迎える何日か前に、彼はこれまで貯めたお金でボクと弟にロボ専用の家をプレゼントしてくれた。自分がこれから行くところに、お金は持ってけないからって。小さな家でごめんな、一緒にいてやれなくてごめんって」

ジョゼフの話聞き、ぼくは焦った。焦って、どうしていい分からず、皿に盛られたマロングラッセをただじっと見つめた。鼻の奥がツーンと痛く、目の奥がぐわーんと熱くなった。さっきからずっと、あの大きな国に残してきた、弟の顔が頭に浮かんでどうしようもない。ぼくはス

パイだろ？ クールで冷酷無慈悲な仕事をするためだけの存在だろ？ でも、それならどうして、どうしてぼくはもっと悪党に生まれなかったのだろう。いつも少しだけ希望を持ちたくなくなってしまふのは、なぜなのだろう。

「でもさ、ジョゼフは今日ネジが止まってたじゃない。どうしたの？ 弟とケンカでもした？」

もしそうなら、弟と仲直りするまでの間、ぼくが背中の中のネジを巻いてあげよう。お互いに色々なことを話して、ジョゼフと親しくできたらいい。そんなことを考えながら、ぼくは尋ねた。

実は……、そう言ってしばらく黙りこんだ後、ジョゼフはドリンクの残りを飲み干した。銀色のボディが一瞬、悲しそうに光った気がした。

「みんな気づいてなかったけど、数日前、コウジョウに私服ケイサツカンが二人来たんだ」

ジョゼフが話しだす。いなくなっても誰も困らない、分からないあのロボの姿がジョゼフと重なる。どうしよう、ではなく、おそらく、という言葉がぼくの頭に浮かんだ。

おそらくぼくは、ジョゼフの話を神妙な面持ちで聞き心を痛める、ふりをするだろう。そのあとで、明日からはぼくがネジを巻くよ、と静かな、でも正義感をにじませた口調でジョゼフに告げるだろう。だってぼくは、やっぱり悪党だから。にごった目をしているから。